

「総合医学賞」というのは医学書院が賞金 10 万円を投じて、毎年優秀な医学論文を顕彰しているものである。今年で 10 回になった。過日受賞者 2 名にその贈呈式をおこなった。

10 回ともなると、どんな賞でもだんだんと権威がついてくる。受賞者のなかからすぐれた学者や有名な教授、助教授が輩出してくるからである。このことは芥川賞や直木賞などにおいても同様である。芥川賞や直木賞の受賞作家がほんくらで一向に芽が出ないということならば、芥川賞や直木賞の権威は地におちてしまうのだが、そんなことはない。受賞作家で、消えて行ったり、うずもれた作家もないではないが、新進作家の登龍門として、この 2 賞は、現

在十分その役割を果たしている。第 1 回の芥川賞受賞者は石川達三であったし、その時受賞を争ったのは太宰治と高見順であった。みな立派な作家となり、文学史に名前を残すような仕事をしたのである。

編集デスク

5

「総合医学賞」について

長谷川 泉

「総合医学賞」も同様である。「総合医学賞」受賞が契機となって外国留学が実現したり、また教授、助教授に昇進する場合の一つの評価となっているのは、この賞が権威づけられて来たことを端的に物語るもので

あろう。

ところで、医学の部門には、そのような賞があるが、ナースの世界には現在そのようなものがないから、ひとつ研究して、ナースの優秀な論文に対しても授賞するようなことを考えてゆきたい。それが契機となって、すぐれた nursing の研究が推進され、よいナースが育ててゆくことは、看護界のために歓迎すべきことだと思うからである。

ナースの世界は、目下優秀な人材が輩出し、勉強して新しい世界を切りひらいてゆこうとする意欲に燃えている。そのような気魄を、ひしひしと感ずるがゆえに、そのようなことを考えるのである。古言にも言う。糞土の牆(しょう)はぬるべからず朽木は雕(え)るべからず。

ているかどうかにも常に検討されなければならない。医師の数は十分に診療の時間はスムーズでも、薬局で時間のロスが多いのが大病院の通弊ではないだろうか(最近、東京の某大病院で、たまたまストの前日であったが、診療のため 1 時間半、薬局で 2 時間半待たされた実例がある。熱のある外来患者がひとりでこれらの時間を待たされることを思うとそら恐しくさえる)。

施設の改善については専門にまたがるので筆を進めえないが、1 例としてあげるならば、電気掃除器のような文明の器具なしには、近代病院の資格はないといえよう。保育器の故障を知らずに嬰兒の死を招いた話題は記憶に新しい。

最後にいいたいことは、組織ももちろん重大であるが、これを活かすためには、従事者全員があるゆる点に細心の注意を怠っては、千じょうの堤も蟻の一穴から崩れ去る危険が起らないとは限らないということである。

病院における女子従業員の数は性格の上から意外に多く、第 2 表でもわかるように、一般病院の一施設当たりの平均は全員およそ 56 人のうち、女子を主とする看護員だけでも 23 人(40%)を占めている。患者を相手とするのに女子がいかに適当であるかはいうまでもなく、看護婦諸姉のあたたか

い応待は患者にとっては救いの女神にちがいない。ときに親切気のない冷たい人に遭遇した場合は期待しているだけ失望は大きい結果になる。この人たちの献身的な奉仕精神が病院の中心的なものになることは誰もが認めるところであって、このためにも待遇の改善は事務首脳者に劣らず、焦眉の急を要すると思われる。

下足番のおばさんの親切、受付女子の軟かいもの腰、医師の行き届いた治療、心のこもった病院の栄養食、清掃の行き届いた清潔な手洗所とそこにさされた一輪の花といったことを思うだに、病院内のたくさんの人たちの協力がかくされていることに思い当たるのである。

組織上の諸問題も、けっきょく病院内の人間同士の和と心がけに帰するといっても誤りではないであろう。さらにりっぱな近代病院としての条件は、むだを排除し、施設を整え、合理的な運営を目ざして行なわれる経営のあり方が結論となりはしないであろうか。前節に述べたストさわざも、同情すべき点が認められるが、全国どここの病院でも社会的な重要性にかんがみ、1 日も早い脱皮を心がけることを祈ってやまない。

(筆者・東京学芸大学教授)